

Garden Diary

ガーデンダイアリー

2021 SPRING

バラと暮らす幸せ

木村卓功さんの
新時代のバラのじょうずな育て方
発表！春の新品種のバラ

四月の「青い花の庭」から

フランスの庭に香り咲く
牡丹と芍薬

暮らしに刺激をくれる
ショップを見つけた！

バラの季節の贈りもの

Vol.15

主婦の友ヒットシリーズ



花色のグラデーションが美しい「明皇宝」

フランスの庭に香り咲く 牡丹と芍薬（ピヴォワンヌ）

文／フローランタン柳楽桜子

「フランスでは、長い冬に別れを告げ、春の訪れを感じるのは4月後半になってからのことです」と、フローランタン柳楽桜子さん。パリ郊外にあるご自宅の庭では、郷里の島根県にある大根島から届けられた牡丹がゴージャスな春を運びます。フランス在住30年、世界を舞台に経済文化交流事業に活躍する桜子さんが、この花のフランスでの普及に力を注いできたのは、牡丹が郷里の花であるからこそ。ソルシュ城で、ジヴェルニーのモネの庭で、桜子さんとその「愛しい牡丹」の物語をお届けします。

私と牡丹との出会い

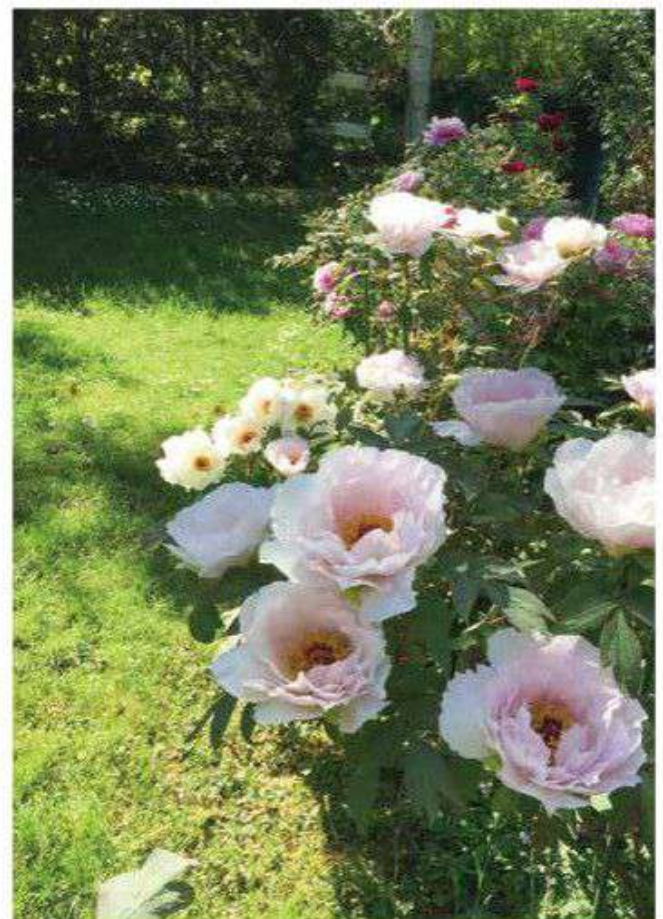
パリで暮らす私と、郷里の牡丹との間にご縁ができたのは、今から約20年前の2002年のことです。日本一の生産量を誇る島根県大根島の牡丹を、「フランスでも紹介して欲しい」と要望された生産者さんたちの熱意がきっかけでした。

フランスでは、牡丹も芍薬も一括りで「ピヴォワンヌPivoine」(*)。あえて区別するとしたら、英語で牡丹を「ツリーピオニー」というのと同じように、その言葉を後に付けて「ピヴォワンヌ アービュスティヴPivoine arbustive(低木)」、芍薬を「ピヴォワンヌ エルバセPivoine herbacée(草)」と表現しますが、一般の人は、ほとんどこの表現を知りません。そんな知識も、郷里の方々の願いを叶えるべく、フランスで牡丹を広めようと決意したことから、当時、得た知識でした。

そして、フランスで牡丹を紹介するには、私自身が牡丹を育て、その特徴や開花状況を把握しておく必要があると考え、大根島で生産された25株の牡丹を、自分の庭に植えて育て始めました。それまでは、牡丹のイメージといえば、日本庭園の中に一株、植わっている印象が強かったのですが、芝生の中に連ねて植えてみると、なんてゴージャス! なんていう存在感なのでしょう! 芝生の庭に、とても良く合うことに気が付きました。さらに、独特の香りまで醸し出してくれるのです。手間も掛からず丈夫な牡丹は、いつのまにか私の庭で、スクスクと勝手に育ってくれました。

牡丹とバラと一緒に咲き誇る瞬間を求めて

ヨーロッパの暗くて長い冬。まだまだ寒い真最中の1月下旬に、早くも牡丹の芽が徐々に動き出すのがわかります。落葉した枝のあちらこちらにある、はっきりとした紅色の芽は、家の中から庭を眺めても、鮮明にその色が目に付きます。暗くて灰色の冬の世界に、この色を見つけると、その芽が徐々に大きくなっていくのと共に、春がやって来てくれるのを感じます。



庭の突き当たりでズラリ並んで咲く牡丹。芝生にとってもよく映える。手前の品種は「八重桜」。「自分の名前の一文字が入っている品種なので、お気に入りのひとつです」と桜子さん。

* この記事でも、牡丹と芍薬の両方を示す場合は、ピヴォワンヌと表記します。



家のエントランスに植えた3品種の牡丹。手前の黄色い牡丹「ハイヌーン」、真ん中の白い牡丹「新扶桑司」、奥の紅色は「八雲」。



牡丹の蕾は、ゆっくりじっくり、時間をかけて大きくなる。品種は「鳥錦」。



上/真紅の「太陽」の枝変わりで、牡丹の中では珍しい紋りの入った「鳥錦」。
下/愛犬も、咲き誇る庭の牡丹を眺めながら日向ぼっこ。

フローランタン柳楽桜子（なぎらさくらこ）

フランス国立園芸協会、パリ市主催バガテル「新品種国際バラコンクール」において、約20年に亘り公認審査官を務める。同コンクールにおいては、2017年、110周年記念の審査委員長に迎えられた。ローズアンバサダーとして世界を舞台に活躍、バラをはじめとする花卉園芸交流に貢献している。また、フローランタン・コンサルティング代表として、日仏間の自治体および民間における、経済文化交流事業を多く手掛けている。ルーヴル美術館、ヴェルサイユ宮殿、パリ市庁、パリ国際会議場とのタイアップなど、大掛かりな交流事業にも実績をもつ。2022年には、フランスのナーセリー「ポール・クロワ」から、「桜子さんに捧げるバラSakurako」が発表される。この耐病性に優れ、かつ八重桜を思わせる可愛らしいバラを、ライレローズのバラ園が、「バラ遺産」として登録し、永遠のバラとして保存されることが決定。

そして2月に入ると同時くらいに、発芽が始まります。牡丹は、枝の先端にある芽が花芽となり、それ以外の芽は、葉となって広がります。花芽が蕾に変化するのを感じ取れるのは、私の庭では3月の初め頃ですが、庭の牡丹は、そこからがもっと楽しみです！

大輪を咲かせる牡丹は、蕾が大きくなるのにも時間が掛かります。硬い蕾が現れた頃、一見、すぐにも花が咲くように思われますが、蕾が開花に必要な大粒のイチゴくらいの大きさになるのに、そこからだいたい5週間を要します。その5週間は長いようでも、蕾がどんどん大きくなるのを眺めるにつれて、今年も美しい花を咲かせてくれることを確信できます。そして何よりも、開花に向けた牡丹のダイナミックな生命力が感じられる、ワクワク待ち通しい時期でもあります。

さあ、そして4月中旬、いよいよ開花です。その年により、多少の時期のズレはありますが、4月20日あたりから我が家の庭では、まるでステージ上のオーケストラが春の訪れを祝う演奏をするかの如く、様々な品種の牡丹が、「庭」というステージで開花を奏でてくれます。これが、遥か私の郷里から届いた牡丹だと思うと、何年経っても感激はひとしおで、感慨深くもあります。

牡丹の開花と同時くらいに、私の庭では、早咲きのつるバラの開花が始まります。最も開花が早い「モッコウバラ」や「マダム アルフレッド キャリエール」、そこにクレマチスも加わり、賑やかさを増します。「モッコウバラ」は、牡丹の開花時期に合わせてたくて、4年前に新たに植えました。毎年、牡丹とバラと一緒に咲き誇る瞬間に出会えるのが、私にとって、何よりの至福のひとつです。庭のつるバラが全盛を迎える前に、牡丹の開花は終わりを告げるので、フランスで華やかな春となる5月初旬に、ちょうどうまく、牡丹からバラへと主役がバトンタッチされる感じです。

ここからは、牡丹の開花に別れを告げて、つるバラからさらに小灌木のバラへと、庭の主役が移って行きますが、5月中旬に咲いてくれる、牡丹と芍薬を交配して作出された「ハイブリッドシャクヤク」や、5月中旬から下旬にかけて咲いてくれる芍薬も、バラとの共演を楽しむ方法として、今後、植えてみたいと考えているところです。



1. 1763年に完成した「ネオクラシック」スタイルのお城。1946年から、国の重要文化財に指定されている。2. お堀の中に咲き誇るピヴォワヌヌ。コレクションなので、原則一品種一株が植えられている。3. 由志園から届けられた「新潟天女の舞」。生き生きと育ちがよく、たくさんの花を咲かせて圧巻。4. 100ヘクタールもある広大なお城の敷地の中を、ベネディクトさんとその愛犬と共に、楽しくおしゃべりしながら散歩するフローランタン柳葉桜子さん。

Photos / ©Yoon Kwansik (1,4)



フランスの庭に香り咲く牡丹と芍薬

Pivoines en fleurs au Château de Sourches

ソルシュ城に咲く牡丹

パリから東に約230キロ。ルイ16世と王妃マリーアントワネットの子供たちの教育係だった、ドゥ ソルシュ伯爵夫人が暮らしのお城があります。現在、そのお城に暮らすのはドゥ フーコー夫妻。夫人のベネディクトさんは、大の牡丹と芍薬好き。まるで現代のジョゼフィーヌ(*1)のごとく、そして大切な種の保存を担うコンセルヴァトワール(*2)として、世界中に存在するありとあらゆる牡丹と芍薬(ピヴォワヌヌ)を収集し、お城のお堀を埋め尽くされています。ベネディクトさんのピヴォワヌヌ収集とコンセルヴァトワールとしての活躍を応援する桜子さんに、牡丹と芍薬の咲くソルシュ城をご案内いただきましょう。

私とベネディクトさんの出会い

2012年12月。私とベネディクトさんの出会いは、偶然のきっかけによるものでした。私の親友のご伴侶が、ベネディクトさんの親友と知り合いで「ソルシュ城の城主夫人が、世界中にある牡丹と芍薬を収集し、そのお城の庭で育てている」ということを聞かれたそうです。親友のご伴侶は、「これはきっと桜子が役に立つに違いない」と考え、私とベネディクトさんがお会いするお膳立てをされました。パリの中心部にある高級ホテルで待ち合わせての初対面。スラリと背が高く美しいベネディクトさんは、ちっとも気取ることのない、さっぱりとした女性でした。すぐに意気投合して「牡丹談義」に花が咲き、なぜベネディクトさんが牡丹と芍薬の収集を始めるようになったのか、どこに魅力を感じるのか？管理はどうなされているのか？さまざまな質問をしたのが思い出されます。この初対面の時には、ベネディクトさんは、日本でこれまでに出産された牡丹については、フランスで生産されている僅かな品種しか保有なさっていなかったため、日本で生産されている希少価値の品種を調達する約束をしたり、私から牡丹の育て方のアドバイスをしたりと、そこから二人の牡丹交流が始まったのです。

*1 ガーデンダイアリー Vol.13p88「ジョゼフィーヌ妃が愛したバラ」参照。*2 文化遺産・自然遺産を保全・管理することを目的とした公的機関ないしその担当者。



「最初、お城の裏に続く敷地に植えたら、近隣のイノシシ、シカ、ウサギに掘り起こされてしまったから、安全なお堀の中に植えることにしたの。ここならお堀の壁で風からも守れるし、イノシシたちも、さすがに降りて来られないから安心よ」と、ベネディクトさん。聞けばお堀の面積だけでも約15000平方メートル！

市場を訪ねた際、一緒だった親友が芍薬の根を見つけて購入したのにつられ、彼女もいくつか購入し、広大なお城の一角に植えたそうです。それをきっかけに、ベネディクトさんは、ピヴォンヌの品種の収集を思い立ちます。「調べてみたら、この世に存在するピヴォンヌを全て収集している所も、品種を絶やささないために保護している機関も存在しなかったの。それなら私が世界で唯一のコンセルヴァトワール・ピヴォンヌになろうと決めたの」という彼女の言葉に、「それには、広大な敷地と財力がなければ成し遂げられない」と、バラのコレクションで知られるジョゼフィーヌに、私はベネディクトさんを重ね合わせました。でも明らかに違うのは、ジョゼフィーヌのバラの収集は、趣味であり道楽ともいえるものでしたが、ベネディクトさんの決意は趣味や道楽の枠を遥かに超えて、「ピヴォンヌの保存を行う」という社会的貢献の姿勢が明確なことでしょう。「牡丹と芍薬では育て方がまったく異なるので、それぞれに適した管理を行うよう、注意が必要よ。こうして多くの品種を収集すればするほど、コンセルヴァトワールとして、その種を大切にきちんと管理するのは容易でないことがわかるわ」と、ベネディクトさん。ピヴォンヌの管理だけに限らず、リスティングやネームプレートの表示も徹底されています。

さて、2013年の時点では、1300品種のピヴォンヌがソルシュ城に集められていましたが、世の中には圧倒的に牡丹よりも芍薬の方が多く存在するため、この時点では、ほとんどが芍薬でした。ですが中国まで直接探しに行ったという、牡丹の野生種まで加わっていて、品種リストを拝見した時には驚きました。さあ、ここからが私の出番です！ 郷里島根県にある大根島の日本庭園由志園にお願いし、まだベネディクトさんをお持ち



ベネディクトさん。3人の庭師が常時管理しているが、ベネディクトさんも時間が許す限り、自ら手入れされている。手前の牡丹は「新紅」、奥が「島根長寿楽」（いずれも由志園）。



ベネディクトさんが7歳の時の写真。この1年後に、お母さまがまいた種からピヴォンヌが初めて開花した。

ベネディクトさんと牡丹・芍薬の出会い

それは何よりも、ベネディクトさんのお母さまの影響だったそうです。ピヴォンヌが大好きだったお母さまは、彼女が生まれる少し前に「この子の遊び場に」と、広大な敷地の一角に小さな庭を確保して、そこに「一緒に成長してくれるように」と、ピヴォンヌの種を、たくさんまきました。「でも、私は母がまいた種が発芽して大きくなったのを、ちっとも覚えていないの。母が用意してくれた『私の庭』の片側には低い生け垣があって、もう一方の端には2本のアプリコットの木と2本の梨の木、そして大きな桜の木に囲まれていたのは、よく覚えているけれど。私の親友だった犬のダイアンの小屋は、私の避難所だったのよ。そして私が8歳だった1976年の春、ある朝、目覚めると、ベッドの側にいつもよりもこやかな母がいた。そしてよそいきのワンピースを着せられて、髪型も整えられたの。母は、『私の庭』に私を連れて行き、目の前に咲き乱れたピヴォンヌが、母がまいた種から初めて咲いたピヴォンヌであることを話してくれた。母から聞かされた瞬間、自分でも感じたの！ バラのような色合いの輝き、花びらの柔らかさとしなやかさ、芳香、花の丸み。美しかった！ 花粉の中を転がる蜂のざわめき。私はその瞬間を決して忘れないわ。写真を撮られるのが大嫌いだったのに、母の誇らしい成功を子供ながらに感じ取りこの時だけは、素直に写真撮影に応じたの。なんて素敵な物語。ベネディクトさんの語らいに、うっとり耳を傾けました。

「コンセルヴァトワール・ピヴォンヌ」としての役割

それから時が流れ、2005年。ベネディクトさんがアムステルダム



「大地の恵を得て、これだけの大輪を咲かせる牡丹の生命力とエネルギーは計り知れない」と、牡丹の魅力を熱く語りながら、開花したその花を各室内に飾るため、ダイニングテーブル一杯に準備する満面の笑顔のベネディクトさん。



ベネディクトさんが牡丹と芍薬について記した本。第1巻は「第一次世界大戦で戦った兵士」に捧げられた物語。それに関連する品種名にまつわる話が興味深い。第2巻は、ビヴォフヌの交配にまつわる話に焦点があてられている。「ソルシュ城」で検索すれば、日本語版が電子書籍で読める。



写真のクレール・フェローニさんをはじめ、3人の画家が、それぞれの画風で、これまでに収集されたビヴォフヌを描いている。右の3点は、フェローニさんの作品。ルドゥーテさながらに、デザイン画による「ビヴォフヌ大百科事典」ができあがるのが楽しみ。



Madame Louis Heney
画 / フランソワーズ・ビクエ・ヴァドン

でない牡丹の品種を、調達して貰うことにしました。由志園でも、これまで日本で作出された、350以上の牡丹の品種を失わないために保管しているのですが、ベネディクトさんのコレクションに由志園の牡丹が加わるのは、たやすいことでした。同年秋に、まずは100品種、以来、毎年40品種が由志園から送られているので、日本で作出された牡丹のほとんどを、ソルシュ城で観賞できます。

「由志園から送られて来る牡丹は、品質も良くて、翌年すぐに大輪を咲かせるから楽しみ」と、ベネディクトさんからも高評価をいただいています。それも大根島で長年培われた接木の技術によるもので、フランスでの技法とその大きな違いを知ることができた私にとっても、郷里の牡丹の品質の高さは自慢です。

ビヴォフヌのデザイン画

2015年春、ソルシュ城でのビヴォフヌが1800種を超えたのと同時に(2021年2月時点では2650品種)、開花の季節に一般公開が始まりました。このお城で開花した多くのビヴォフヌが、ボタニカルアートの画家により美しいデザイン画として描かれたものも同時に公開されました。



La ville de Saint-Denis



Chromatella



Mathilde



伊藤東一作出(左)の「イエロー エンペラー」と、その枝変わり「ホワイト エンペラー」(上)。「イトウハイブリッドは、どのピヴォファンよりも丈夫で耐病性があり育てやすい」と、ベネディクトさんのお気に入り。伊藤氏にこの言葉がきくと届いていると思いを馳せて、そのオマージュとなるベネディクトさんの4巻目の本の出版を、心待ちにしている。



お城のまわりの畑の中に植えられた牡丹と芍薬。アメリカ産の「Strawberry delight」。

フランスの庭に香り咲く牡丹と芍薬

伊藤氏は、花菖蒲や菊の交配も多く手掛け、一世を風靡した園芸家でした。でもなぜか、ご本人のきちんとした経歴がどこにもなく、当時の書籍や記事を探しても、岐阜県出身であること以外は出生年さえ不明で、想定でしか記載されていません。八方手を尽くしても、ほとんど何もわからずお手上げでした。それを伝えたところ、どうしても諦められないベネディクトさんは、「SNSで、情報提供を呼び掛けてでも、イトウの経歴を探っ欲しい」と、引き下がらないのです。私も、「欧米でこれだけ著名な伊藤東一が、日本で忘れ去られているのは忍びない。同じ日本人である私が諦めてはいけません。ベネディクトさんの熱意に応えるべきだ」と、ここから奮闘をはじめました。伊藤氏が岐阜県出身だったこともあり、岐阜県立国際園芸アカデミー前学長・客員教授で、花フェスタ記念公園理事の上田善弘先生に協力をお願いしたところ、伊藤氏の出身校の記録から、生年月日が1895年(明治28年) 10月29日であること、また出生地も見つけ出してくださいました。さらに、伊藤氏が長野県で教師として勤務なさっていた「木曾山林学校」の跡地にある「木曾山林資料館」に、私が直接問い合わせた結果、その資料館からも、さまざまな貴重な記録が見つかり、そのおかげで、その後、東京で活躍なさった年代も明らかになりました。これまで不明だった伊藤東一の経歴が、出生から125年も経たず、一人のフランス人女性の情熱により解き明かされたのです。ベネディクトさんの4巻目の本を楽しみに、上田先生をはじめ、ご協力下さった日本の方々、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

画風にこだわりを持つベネディクトさんは、これまで数人の画家を招いて、特にニュアンスを表すのが難しいとされる品種を描いてみて貰い、それを一つの目安に採用を決めているのだそうです。現在は3名の画家が、それぞれ自分の画風でひと品種ずつ、丁寧に描いています。「なぜ画家を招かれているのですか?」という私の質問に、すかさずベネディクトさんは答えてくれました。「究極の目標は、ルドゥーテ(*)がバラで実行したように、デザイン画によるピヴォファン大百科事典を公開できること」。その答えに、やはりベネディクトさんは、現代のジョゼフィーヌだと、その姿を重ねてしまいます。

*ルイ16世王妃マリーアントワネットと、ナポレオン皇后ジョゼフィーヌに仕えた宮廷植物画家。

ベネディクトさんの伊藤東一への情熱

ベネディクトさんは、「牡丹と芍薬について」のタイトルで、これまで3冊の本を執筆し発行されています。4冊目は、「牡丹」と「芍薬」を交配させて、世界で初めて黄色い芍薬(イトウハイブリッド) を作出した「伊藤東一」をテーマにしたいと、私にその経歴調査を依頼されたのです。これらの黄色い芍薬は、伊藤氏が1955年に他界後9年も経て、1964年に後継のお弟子さんの努力で開花しました。それに着目したアメリカの園芸家で、「アメリカピオニー協会」会長も務めたルイス・スミノーフ氏がアメリカに導入したため、伊藤氏作出の品種は、日本よりむしろ欧米で有名になり、今でも高評価を得ています。

モネはジヴェルニーの庭で牡丹を栽培した？

郷里の牡丹をフランスで広めようと決意してから15年を経た2017年春に、由志園の常務門脇竜也さんが、ソルシュ城への訪問も兼ねて、久々にフランスを訪ねていただきました。様々な努力が実り、フランス最大の園芸卸売市場への流通などを経て、バラのナーサリーとして有名なアンドレ・エヴ社が、2015年に由志園から出荷される牡丹と芍薬の欧州代理店となり、今では大量数がフランスで流通されるようになりました。そこから近いオルレアン市内にある植物園にも牡丹園が開設され、その記念式典で、竜也さんにこんなエピソードを披露してもらいました。「日本で生産されている牡丹は、じつは古くからフランスにも縁があります。日本文化に影響を受けた画家のクロード・モネは、ルイス・ペーマー(*)という日本に住んでいたドイツ系アメリカ人の園芸技師に依頼し、1880年代初頭に横浜港から牡丹を運んでもらったらしいのです。奇しくも130年前の1887年に、モネが描いた有名な作品のひとつ、『牡丹』には、モネが特に熱心に収集した江戸時代の浮世絵の中に頻りに描かれている牡丹と同じように、葎屋根で保護された牡丹の光景が描かれています。この絵画から想像できるのは、モネがジヴェルニーの庭で、実際に花を雨から守る葎屋根を施してボタンを栽培し描いたことです」

このエピソードを読み上げた後、竜也さんは、真顔で私に言いました。「桜子さん、今は消滅しているにしても、かつてモネの庭にあった牡丹棚を、何とかして復元できませんか?」。突拍子もない竜也さんの発案に、長年日仏間の交流事業を手掛けてきた私も、さすがに躊躇しました。「世界に名高い『モネの庭』で、本当にそんなことができるのだろうか……」と。

日仏友好160周年記念に絵画「牡丹」を復元

モネは1900年初頭に、フランスにおいて最初のジャポニスムを巻き起こした先駆者でした。ちょうど日仏友好160周年を迎える2018年を目前に、モネ財団のユグ・ガル会長は、「今後の日仏友好のためにも、130年前と同じように、日本から届けられた牡丹によって、モネの庭に牡丹棚を復元させるのは素晴らしい発案」と、ジヴェルニーのモネの庭に、モネの描いた絵画「牡丹」を復元したいという願いを快く受け入れてくださいました。さっそく、パリのバガテル公園主催の「新品種国際バラコンクール」のパリ市公認審査官と一緒に務めている、「モネの庭」の庭園長のジルベル・ヴァエさんと、準備に取り掛かりました。40年にわたり、モネのエスプリを守り続けた天才庭師のヴァエさんも、由志園から空輸された牡丹の品質の良さに驚かれ、2018年4月の復元に向けて、苗の管理に大いに力を注いでくださいました。そして絵画復元記念式典当日、澄み切った快晴のジヴェルニーでの空の下、駐仏日本国特命全権大使木寺昌人(2016年～2019年ご在任)夫妻をお迎えした郷里の愛しい牡丹たちは、いっせいに開花し、130年の時を経て、「モネの庭」の新たな顔として仲間入りしてくれたのです。

高品質が評価され、今ではフランスで、多くの一般の人たちに愛されて開花を続ける郷里の牡丹たち。私の庭の、その牡丹たちに目をやりながら、日仏花交流に一役買ってくれているのを誇りに思いつつ、もうすぐ始まる今年の開花の気配を、今か今かと待つこの頃です。

Pivoines en fleurs au jardin de Claude Monet

「クロード・モネの庭」に咲く牡丹

印象派の画家、クロード・モネが情熱を注いだジヴェルニーの庭に、かつてモネが描いた「牡丹」の絵のシーンが、2018年、日仏友好160周年を記念して再現されました。バラをはじめ、日仏の花弁園芸交流に活躍する桜子さんの郷里島根県が誇る大根島の牡丹を、フランスで広める努力を20年近く継続してこられた桜子さんの心意気が伝わってきます。



Claude Monet
Peony Garden
1887
oil on canvas

The National Museum of Western Art, Tokyo
Matsukata Collection
国立西洋美術館(*)



上／葎葎き屋根の下で開花した牡丹を前に、復元記念式典に集まってくれた仲間たち。左奥から由志園の門脇竜也さん、園芸家でビヴォワヌの本も出版されているフランク・サドランさん、アンドレ・エヴ社代表のバスカル・ピネルさん、モネの庭名譽庭園長のジルベル・ヴァエさん。
下／絵画「牡丹」復元記念式典のテープカット前に、溝間の牡丹を眺めながら談笑される木寺昌人駐仏日本国大使ご夫妻と、「牡丹柄」の着物をまとった桜子さん。
Photos／©Nicole Boschung





フランスの庭に香り咲く牡丹と芍薬

モネが描いた絵画「牡丹」のイメージに、なるべく近い品種が由志園で選別され届けられた。いくつかの薫養き屋根が連なる中に植栽され、チューリップやムスカリなど球根花の他、すみれ、ルピナスなど見事に調和し、まるで絵画そのもの。写真の牡丹の品種は、右手前から「八千代椿」、その奥「天衣」。左手前「花王」、その奥「聖代」。Photo / ©Yoon Kwansik



由志園 常務取締役 門脇竜也さんが語る

「日本とフランスの130年前の牡丹の交流を再び再現する」

日仏友好160周年という運命的なタイミングの中で、庭園における洋の東西の交流は大いに魅力的でした。由志園では数多くの牡丹の中から、モネが描いた牡丹の絵画から想像される品種をセレクトしてお届けしました。それらの牡丹と、ジヴェルニーに自生する草花や多彩な園芸種のチューリップなどの色彩のマリアージュは、私の想像を遙かに超えた美しさを宿していました。光を見たまに描くという新たな写実の革新をもたらしたモネの挑戦の足跡は、色あせることなく、由志園の未来に大きな学びを与えていただけました。

(有) 日本庭園 由志園 島根県松江市八束町波入1260-2
☎0852-76-2255 <https://www.yuushien.com>

* ルイス・ペーマー／明治初期に開拓使(北方開拓のために設置されていた日本の官庁)に雇用され10年に亘り北海道で勤務した。1882年から横浜に輸出入園芸業「ペーマ商会」を設立。そこから日本産の牡丹が、モネの手に届けられたと言われている。

* 国立西洋美術館

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

開館時間: 9:30～17:30 金・土曜日 9:30～20:00

※入館は閉館の30分前まで

休館日: 月曜日(休日の場合は翌平日)、年末年始

URL: <https://www.nmwa.go.jp/>

※館内整備のため2020年10月19日(月)～2022年春(予定)まで全館休館。